

令和6年度 NITS・岐阜大学教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業 ポジティブな学校文化をつくるエビデンスを活用する管理職研修

1 研修開発の趣旨

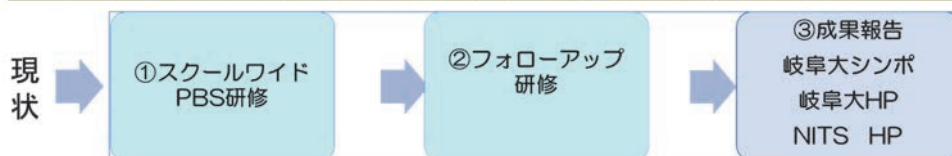
今日、不登校やいじめ、特別な支援を必要とする子どもの増加を受けて、管理職が教職員と協働して、多様な子どもが安心して学べるポジティブな学校文化を構築することが緊喫の課題となっている。その課題を解決するために、全ての子どもよさ（望ましい行動）に注目し、それを引き出し、認め合う仕組みをつくるスクールワイド PBS のエビデンスが注目される。

本事業では、管理職が教職員と協働して、多様な子どもが安心して学べるポジティブな学校文化をつくるために、スクールワイド PBS を学び、活用するための研修を開発した。

2 内容

研究協力者：山県市小学校 9・中学校 3 の校長先生（及び校内担当者）

・ 管理職がエビデンスを活用するには、エビデンスを学ぶだけでなく、学校経営の中で、方針を考え、実践検討する研修が有効ではないか？



①スクールワイド PBS 研修 8月20日（火）13:00-15:00

第1部 スクールワイド PBS の講義とモデル校の実践報告

講師 岐阜大学教職大学院（平澤紀子教授、原尚特任教授、古賀英一特任教授）

山県市教育長 服部和也氏、教育委員会担当者 土田哲也氏

小学校モデル 大村統子氏、中学校モデル 伊藤泰介氏

第2部 グループワーク：自校の充実策の作成

第3部 全体交流・まとめ

【スクールワイド PBS（ポジティブ行動支援）とは？】

全ての子どもを対象として、学校を安全で効果的な学習環境とするために必要な社会的文化や個別の行動支援を確立するシステムアプローチで、学校組織がエビデンスを活用する枠組みである（Sugai & Horner, 2009）。教育制度(IDEA)に位置づけた米国を中心として世界的に拡大し、日本でも徳島県や宮崎県、山県市では教育振興基本計画に位置づけて取り組んでいる。スクールワイド

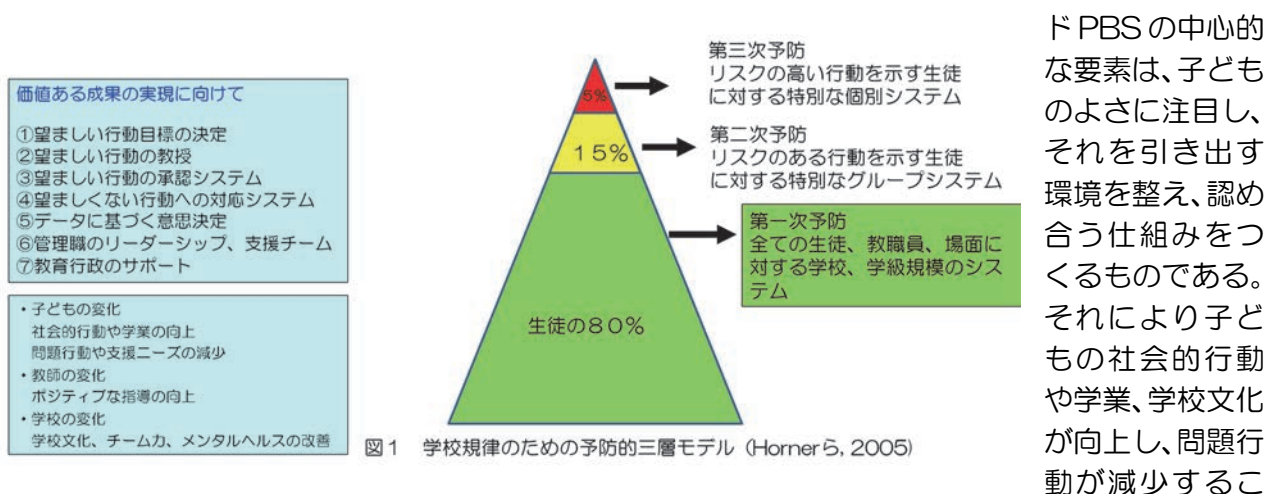
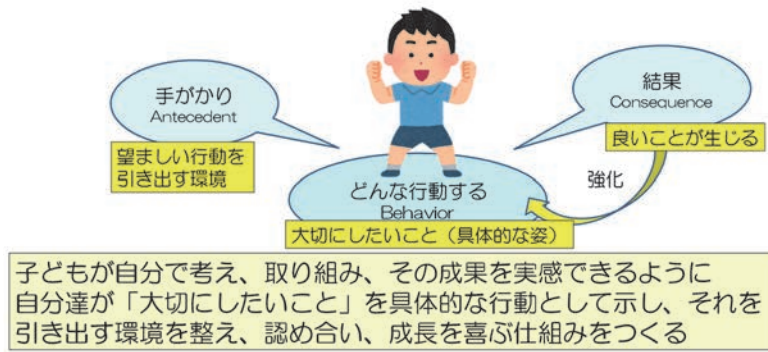


図1 学校規律のための予防的三層モデル (Hornerら, 2005)

ことが明らかにされている。わが国の学校教育への親和性も高く、安心して学べる学校づくりに資することが明らかにされている。

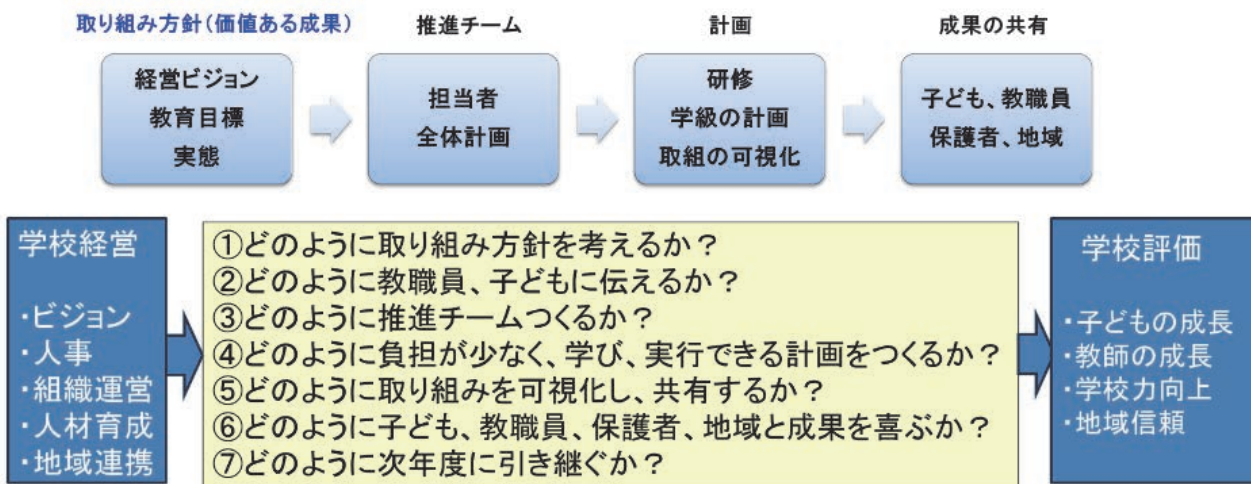
【行動理論に基づく取り組みの具体化・可視化・共有】



行動理論に基づき子どものよさを引き出し、認め合う仕組みをつくる。教師がルールを増やすのではなく、それぞれが大切にしたいことを尊重し、認め合う文化をつくることを目的とする。多くの学校で行われている「よさみつけ」は、「何をよさとするのか、よさを発揮する機会やスキルがあ

るか、その成果が実感できるか」から充実させることができる。

【学校経営における方針】



スクールワイド PBS が成果を実現するためには、意図した実践がどの程度実行されたかが重要。その実行度評価（TFII）を基に、学校経営の中での方針（①価値の明確化、②推進チームの設置、③実行計画、④取り組みの可視化と共有）を明確にする。

【山県市のスクールワイド PBS の取り組み】

教育長が「ほめる教育の実践で子どもたちの安心した学びに到達しているが、さらに子ども自身が行動して、そのよさを実感するところに伸びしろがある。そこに、エビデンスを活用する意味があるのではないか。」と問題提起した。そして、スクールワイド PBS を教育振興基本計画に位置づけ、学校を支える教育委員会の推進チームをつくり、モデル校を決めて、その成果を全学校で共有する仕組みをつくった。

小学校のモデル校では、校長が「教師のベクトルを同一にし、子どものよさを伸ばしたい」と考えた。校長、生徒指導、指導教諭を推進チームとして、生活規律に関する3つのキャンペーンを計画し、学級で取り組み、その成果を可視化した。話し合いの中で、子どもから個々を尊重する意見やどうしたらよくなるかの解決策ができるようになった。学校生活アンケートで取り組みの大切さやうれしいことがあったことが評価され、SDQ 評価で子どもの支援ニーズの減少がみられた。

中学校のモデル校では、校長が「生徒は教師の指示には従うが自分で目標設定し、取り組む自信を伸ばしたい」と考えた。校長、特別支援教育コーディネーター、生徒会担当、生徒会を推進チームとして、生徒が自分のめあてに取り組む「マイチャレンジ」のキャンペーンを行い、各自の取り組みに教師や他生徒がコメントする仕組みをつくった。生徒アンケートでは他者から認められる安心感や意欲の向上が指摘され、自己効力感の評価では向上がみられた。

【グループワーク】

スクールワイド PBS の視点から、自校の取り組みを振り返り、自校の充実策を作成した。

②フォローアップ研修 12月23日(月) 13:00-15:00

各校の実践成果を報告交流し、管理職がどのようにエビデンスを活用できるかを検討した。



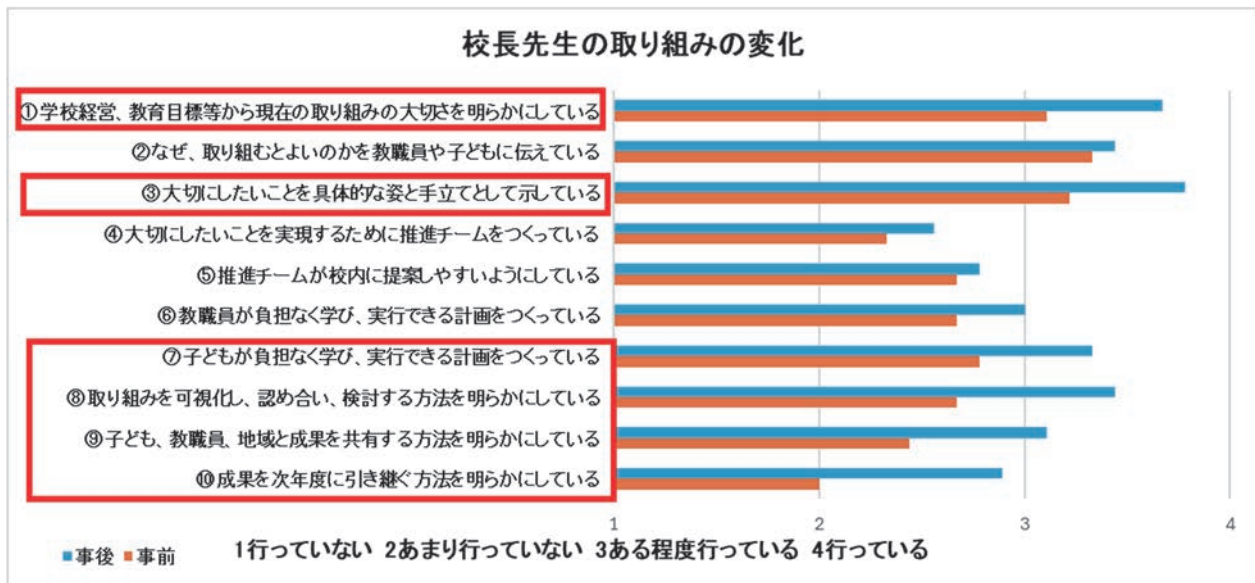
いずれの学校も、自校の子どもに願う姿や教職員の状況を踏まえて、現在の取り組みを充実させた。とくに、自分達は「何を大切にするか」という目標設定や認め合いの仕組みを見直した。ある学校では、校長先生が児童会の言葉を取り組む目標とした。ある学校では、生徒が自ら目標を考え、決めるプロセスを見直した。ある学校では、一人一人が活躍できる目標を提案した。教育目標そのものの見直しを教職員に問うた学校もある。そして、校長先生は担当者に働きかけ、取り組みの成果を共有できるようにした。一方、「何をよさ」と捉えるかで学校は大きく違う、目指す姿や現状を踏まえた方針が重要という問題提起、個々に必要な支援や経営課題を把握し、進捗状況や成果を検討するためのデータ活用という次なる取り組みに向けた課題も指摘された。

3 研修評価

①全体的満足度 10点中8.6点

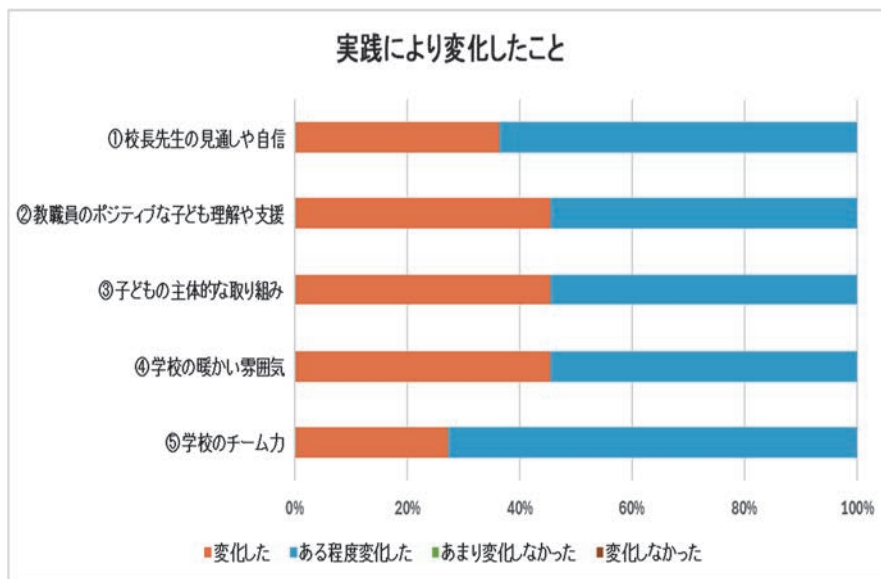
②研修で得られたこと 「知識」「現在の取り組みを充実するための視点や方法」「新たな取り組みの視点や方法」のいずれも「得られた」「ある程度得られた」と回答された。

③校長先生の取り組みの変化



「大切にすること」や「具体的な姿や手立て」「認め合い」の仕組みを充実させていた。

④実践により変化したこと



校長先生の見通しや自信、教職員のポジティブな子ども理解や支援、子どもの主体的な取り組み、チーム力のいずれにおいても「変化した」「ある程度変化した」と捉えていた。とくに、校長先生自身が学校経営の中で現在の取り組みの位置づけをあらためて認識したこと、子どもが安心して発言したり、自らこうしたいとする姿がみられるようになったり

りしたこと、教職員が子どもの願いやがんばりを受け止める感度が高まったことを指摘された。

⑤School Climate

事前（6月）と事後（1月）、児童生徒に学校生活アンケート（School Climate: 若林他作成：25項目4件法回答）を行った。その結果、「目標やルールの明確化」「先生は児童生徒を大切にしている」「児童生徒は認め合っている」の評価点が有意に向上した。

4 管理職はエビデンスをどのように活用すればよいか（校長先生の考察の抜粋）

- ・スクールワイドPBSは「よさを認める仕組みづくり」。「何をよさ」と捉えるかで学校は大きく違う、目指す姿や現状を踏まえた方針が重要である。
- ・「よさみつけ」を軸にポジティブな学校づくりに取り組んでいたが、手探りであった。エビデンスを活用し、学校経営の妥当性を確認し、充実策を明確にすることが重要である。
- ・いくら有効なエビデンスがあっても、自校の教育を充実する方針がなければ、役にたかない。管理職はエビデンスの本質を見極め、取り組み方針を明確にすることが重要である。
- ・子どもの教育成果は見えにくく、ゆえに手応えもわかりにくい。データを基に必要な取り組みを明確にし、その推進状況を可視化すると、子どもと教員とともに考え、充実できる。

5 NITS・岐阜大学教職大学院等コラボ研修成果報告シンポジウム

令和7年2月3日（月）13:00-15:50、「ポジティブな学校文化をつくるエビデンスの活用」を実施した。全国の大学、学校、教育委員会、市民等264名が登録し、活発な討論がなされた。（第1部基調講演「管理職研修の高度化と教職大学院の役割」（文部科学省総合教育政策局長 茂里毅氏）、第2部事業報告、第3部参加者交流）

6 他の教育委員会等への参考

- ①NITSの研修観を踏まえ、管理職が課題解決に向けたエビデンスを学び、活用する研修を提案。
- ②本研修により、管理職の職能の高度化および教育委員会の学校支援の向上を図れる。
- ③オンライン研修で、負担を軽減しながら、研修成果の勤務校や地域への還元ができる。
- ④全国の教職大学院や教育委員会に対して、管理職研修や教育委員会の学校支援に役立つ。

謝辞

研究協力者として研修を受講いただいた校長先生、ご協力いただいた岐阜県教育委員会様、山県市育委員会様、岐阜県小中校長会様、岐阜大学附属小中学校様に深く感謝申し上げます。